

## 本学競技者に関する研究 (5) —運動部所属卒業生への心理学的調査—

阿江 美恵子 雨ヶ崎 俊子 掛水 通子

### 諸言

本学の過去40年にわたるエリート競技者については、平成8年度の紀要でまとめられた(阿江、1997a、掛水、1997)。エリート競技者に関連する競技力向上の研究は、体育・スポーツに関する実践分野の3領域の一つにあげられているし(松田ら、1987)、「女子のスポーツ適性に関する研究」も1981年から、3ヶ年にわたって行われた(日本体育協会スポーツ科学委員会、1982、1983、1984)。エリート競技者を多面的に扱った研究も見られる(Butts, N. K. et al., 1985)。また、本学のエリート競技者の本も出版されている(山崎、1994)。

それに引き換えエリートではない普通の競技者ははるかに多く、競技レベルも様々であるが、その実態についてはあまり研究されていない。彼らの中には大学に入学してから、それまでとは異なる競技を開始した者もいるし、途中でやめたものもいるに違いない。人間のスポーツへの関わり方は様々であるが、ここでは先の研究で対象とした国際大会に出場した者を除き、競技力がかなり低い者も含めて、競技することを目的として活動している者を競技者と定義することにした。とくに本学で競技運動部に加入した者は、その活動の実態はともかく<sup>(脚注)</sup>、競技というものがどのようなものかを十分認識していると考えられるので、競技者として扱うこととした。

本研究たちは、女性競技者の競技人生に関心を持っている。近年の女性競技スポーツの隆盛はめざましい。しかし、スポーツが市民権を得て、多くの人々の関心を得るようになったのはそれほど昔のことではない(杉本、1995a)。スポーツ競技者の考え

方にも時代的な変化が見られるに違いない。

第二に本学の運動部で大学生活を送ったということに関心を持っている。本学の運動部は競技力が高く、勝つことを目標にした指導者を有する典型的な学校運動部である。杉本(1988)によれば、学校運動部とは具体的には「やらせる、やらされる」関係が指導者との間でできあがり、逸脱者をださない努力がなされている、というようなスポーツ集団であるという。先の研究ではエリート競技者を対象としたが、今回はエリートではない競技者を対象として、大学時代のスポーツとの関わりを、主として心理学的側面から検討し、競技スポーツの女性に与える影響を明らかにする資料を提供することを目的とした。

### 方法

#### 1. 調査方法

東京女子体育大学の8運動部(トランポリン、スピードスケート、卓球、新体操、バレーボール、ソフトボール、フェンシング、カヌー)の卒業生名簿からランダムに抽出した653名に調査用紙を郵送した。有効回答数は223名であった(回収率34.15%)。尚、各部の名簿は必ずしも全て揃ってはいなくて、欠落もあったので、厳密にはランダムとは言えない。また、名簿の十分に整備されていない部、調査に間に合わなかった部などがあったことによる回答の偏りは、本研究の限界である。

#### 2. 調査期間

1997年7月から10月。

脚注 練習に熱心に参加しないとか、意欲が見られないとかという問題を指す。

### 3. 調査内容

エリート競技者の調査(阿江ら、1997a)で用いた調査項目からエリート選手用の内容を削除し、競技継続の様子を直接問う質問を追加した質問用紙を作成した。具体的な質問内容は阿江ら(1997a)とほとんど同じである。尚、調査用紙の内容はもう少し多くの事柄を含んでいるが、本研究はその一部であり、共同研究者がさらに次のまとめを検討中であることを明記する。

## 結果および考察

本研究は、調査の心理学的内容のみを分析した。

### 1. 対象者の属性

回答者のうち、ダンス部であったと回答した2名(新体操部は過去には競技を行わないダンス部であったため)と世界選手権出場の1名(先の調査でもれた)の計3名を除き、220名を結果の分析に用いた。年齢は、20歳から65歳にわたり、平均年齢35.4歳であった。短大卒業が44名、大学卒業が176名であった。対象者の運動部別人数は、以下のとおりである。

トランポリン32名、スピードスケート18名、卓球20名、フェンシング26名、バレーボール28名、ソフトボール39名、新体操43名、カヌー14名。  
大学卒業年度は、昭和20年代1名、昭和30年代10

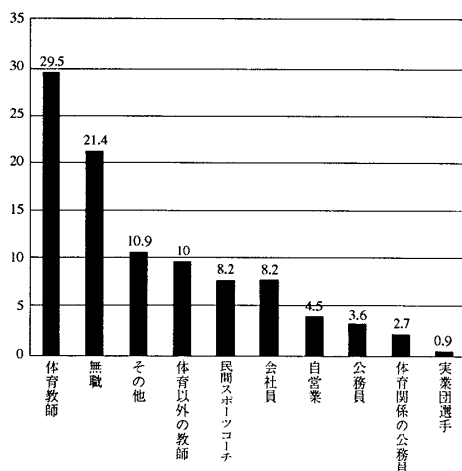


図1. 現在の職業

名、昭和40年代38名、昭和50年代55名、昭和60年以降116名であった。

図1は対象者の現在の職業である。体育教師3割、無職2割であった。また、有職者のうちフルタイムが74%、パートタイマーが25.9%であった。

### 2. スポーツ継続のキャリア

表1は、対象者が過去にどのようにスポーツとかわかったかをまとめたものである。記号の同じところは同一種目であり、空白はスポーツ活動をしなかった時期である(必ずしも競技スポーツばかりではない)これを見ると、同一種目継続型(空白期間のあるものを含む)が37.5%、異種目継続型が51.9%

表1. 種目継続キャリア

小中高大	人数	%
○○○	38	17.8
○○○○	32	15
△○○○	29	13.6
□△○○	19	8.9
△○○	18	8.4
△△○○	14	6.5
△□□○	13	6.1
□△○○	11	5.1
○○	9	4.2
△△○	8	3.7
◎□△○	5	2.3
△△△○	4	1.9
△○	4	1.9
△ ○	3	1.4
□ △○	2	0.9
□○△○	1	0.5
○△○	1	0.5
△ ○○	1	0.5
△○△○	1	0.5
○ ○	1	0.5

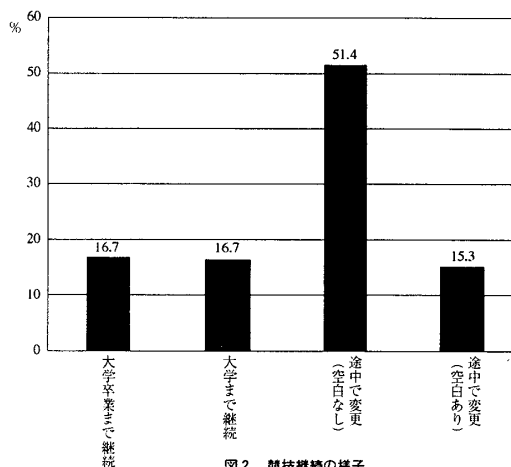


図2. 競技継続の様子

であった。中学校からスポーツを開始した者は81.9%であった。エリートとは言えないものの大学で競技スポーツを選択した本対象者たちは、スポーツのキャリアとしては、十分な経験を有していると考えてよい。

また、高校と大学で同一種目を継続した者が74.9%にのぼることがわかる。図2は、最初に開始したスポーツをどのくらい継続したかを示したものである。一つの種目しか体験していないものが3割はいた。

その反面、専門性の高くなる大学で、高校とは異なるスポーツを選択した者は24%であった。新たな種目を選択した理由は図3に示した。種目を変えなかったという理由が一番多かった。図4には卒業年代ごとに種目を変更した割合を示した。尚、各年代の人数は昭和20年代1名、30年代9名、40年代38名、50年代55名、60年代以降115名である。対象とした

部では、近年高校と大学で同じ種目を行うものが増えていると考えてよいようである。

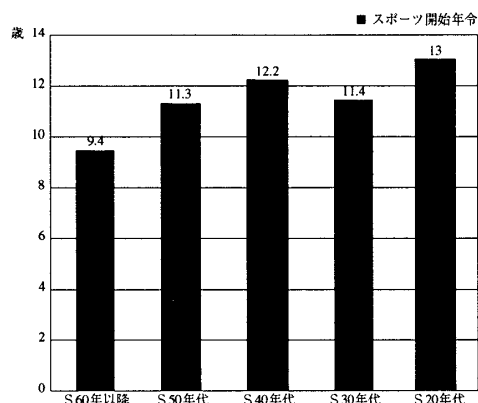


図5. スポーツ開始年齢

### 3. スポーツの開始

スポーツの開始年齢の平均値は10.5歳であった。

図5は、大学卒業年別のスポーツ開始年齢の平均値を図示したものである。これを見ると、昭和60年代以降（ここ10年くらい）のスポーツ開始年齢がかなり若くなっていることがわかる。昭和20、30年代は人数が少ないため対象者の部が限定される傾向はあったが、60年代以降は特定の部に偏ることはなかったため、開始年齢は明らかに早くなっていると考えられる。

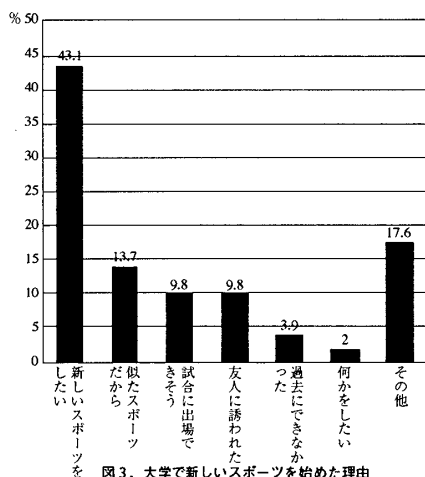


図3. 大学で新しいスポーツを始めた理由

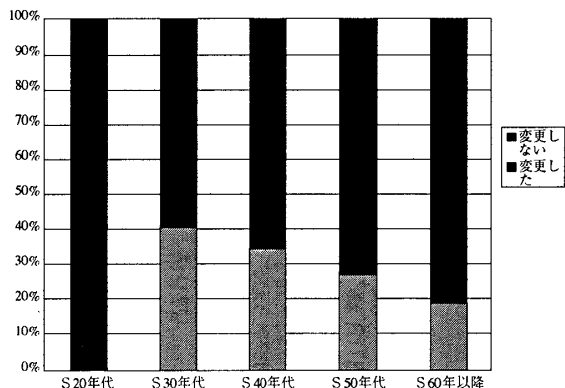


図4. 大学で種目を変更した割合

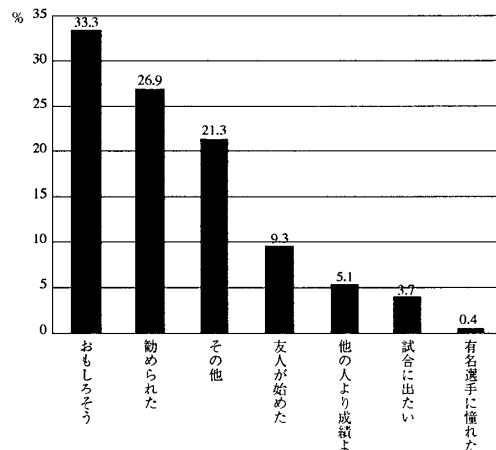


図6. 最初にスポーツを開始した理由

図6はスポーツを開始したときの理由を示したものである。「おもしろそう」「試合に出たい」という内発的動機づけが3割、「勧められた」「友人が始めた」「成績が良かった」という外発的動機づけが4割を占め、女子スポーツ選手の開始動機は外発的な

理由がやや多いことが示された。

#### 4. 大学での競技生活中のこと

大学時代に、治るまでに1ヶ月以上かかる怪我をしたことのある者は、46.5%（110名）であった。どうも怪我が多いように思われる。

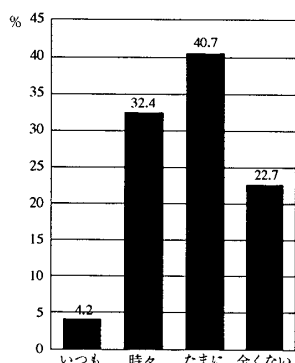


図7. 部活をやめたいと思った頻度

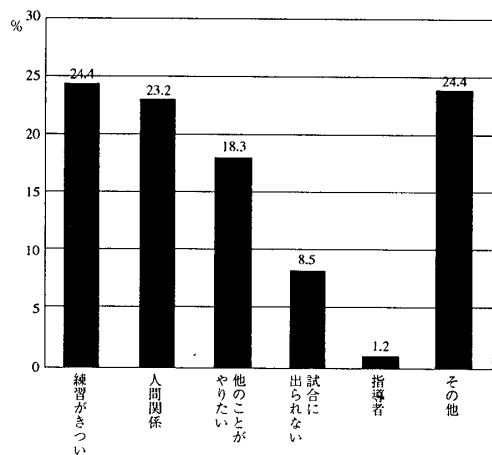


図8. やめたいと思った理由

図7は部活をやめたいと思った頻度を答えさせたもので、そこで「いつも」「時々」「たまに」と回答した167名（75.9%）にその理由を一つ選択させた結果が、図8である。いつも部活をやめたいという者は4.2%と少数であった。やめたい理由を見てみると「練習がきつい」「人間関係」で5割弱であった。「試合に出られない」「指導者」も含めると約6割が部活動に付随する要因であった。不平不満は人間行動の常ではあるが、エリートではない競技者のほうに不満が多くなるのはある意味では当然であろう。

競技生活に必要な経費は、92.3%が両親に負担し

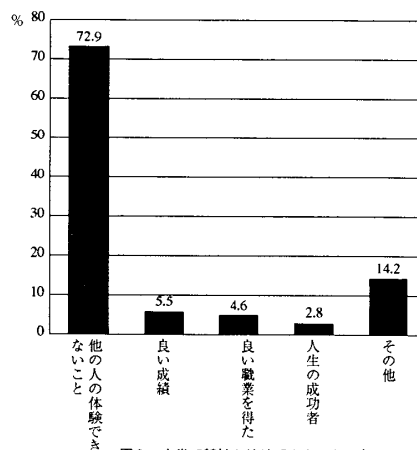


図9. 大学で競技を続けて良かったこと

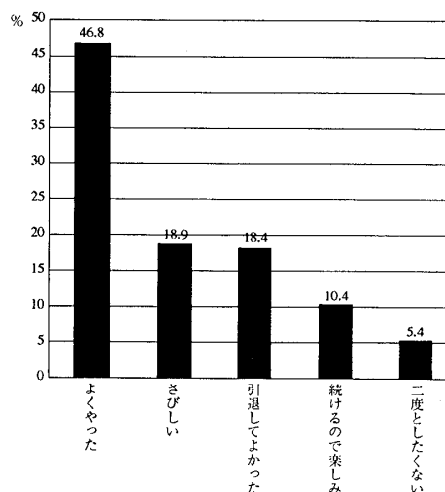


図10. 競技引退時の気持ち

てもらっており、競技力の高かったと思われる4.9%が大学や後援会からの補助金を得ていた。

大学で競技を続けて良かったことを一つ選択させた結果が図9である。7割以上が「他の人の体験できない良い経験ができたこと」をあげた。関連して、競技を引退したときの気持ちを一つ選択して答えさせたものが図10であるが、ここでは、「よくやったと自分をほめた」が半数近かった。競技を続けて苦しいことも多かったが、それを成し遂げた自分を肯定的に評価している様子が伺える。5.4%の「二度としたくない」者については、ぜひ追跡調査をしてみたいものである。

図11は娘がいたら同一種目をさせたいかを答えさせたものである。「全く思わない」が20.9%、「どちらともいえない」が50.5%と、能力がなければ成績を上げられないだけに、すぐには肯定できない部分

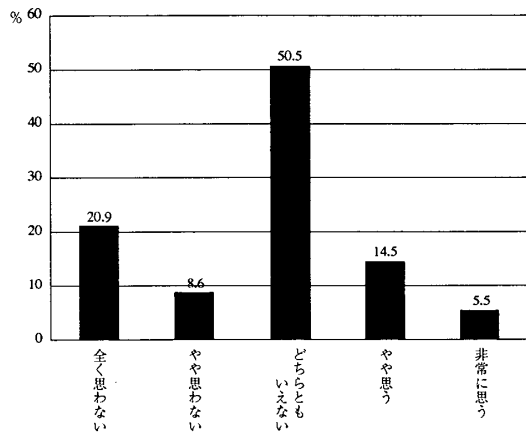


図11. 娘に同一種目をさせたい程度

が競技スポーツにはあるようだ。

杉本 (1995b) の言を借りれば、「学校におけるスポーツは常に教育目標に向かって、努力することが強調され、試合に負けることは、その努力が足りなかったこととして理解され、さらなる努力を要求するという循環になっている。」ので、安易に他人に勧められるものではない「苦しい」ものにとらえられている部分があるのだろう。大学の運動部が何を指すのかの議論を含め、エリートではない成員を内包していくための工夫はもっとなされるべきではないかと考えられる。

## 5. 勉学との両立

一般に、学生の競技者は部活動と学生としての勉学との両立を期待されている。部活動は、仕事ではなく課外活動なので、長い練習時間は、学生としての生活を圧迫し、様々な問題を学生に引き起こしている (Etzel, E. F., et al., 1991)。

とくに、体育大学の学生はしばしば両立に苦勞している。それは大学の競技スポーツが限りなく「仕事」に近いという現実があるからである (Calhoun, D. W., 1987)。本研究の対象者たちも両立に苦勞した人としらない人が、ちょうど半々であった。

彼らが勉強嫌いかというとは必ずしもそうではなく、もっと勉強しておけばよかった科目を自由記述させると、「スポーツ医学」「運動生理学」「解剖学」「救急法」「テーピング・マッサージ」などスポーツの生理学的側面の科目への希望が最も多かった。そ

の他には「心理学」、「英語」があげられた。また、取得しなかった免許では、「小学校教諭」と「養護教諭」があげられた。

このような要望は、現在どのような職業に従事しているかに影響されるし (図1参照)、現在の社会情勢を反映するものでもあるが、それでも本学の教育内容に関する資料となると思われる。また、カリキュラムの改善論議の見られる昨今であるが、運動部所属者でさえ、一部はもっと専門的な体育の理論の勉強を希望しているということを指摘したい。

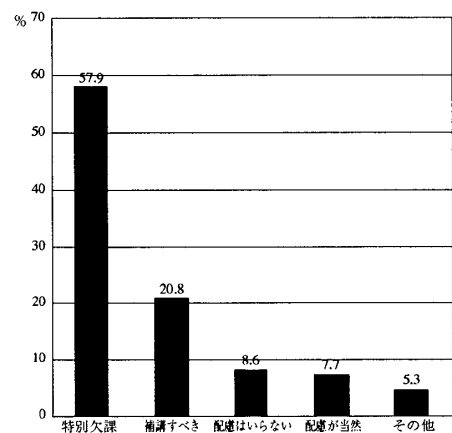


図12. 試合への大学の配慮について

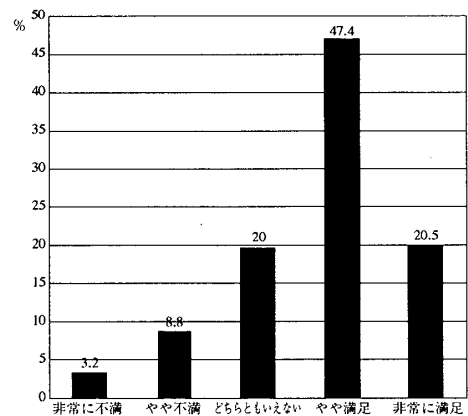


図13. 本学への満足度

図12は、試合等への参加についての大学の配慮をどう思うかを回答させたものである。特別欠課という現在の制度で十分が6割、配慮賛成が3割、不要論1割であった。少なくとも大半の競技者は「個人で両立すべき」と考えていると言えるであろう。

本学で学んだことに対してどの程度満足しているかを評定させたものが図13である。7割が肯定して

いた。

### 6. 大学卒業後の競技スポーツとの関わり

図14は大学卒業後に競技スポーツを継続したかどうかを示したものである。競技を引退した者は65.6%、種目の変更も含めて競技スポーツを継続した者が27.8%であった。少数ではあるが実業団の選手として就職している。その種目はフェンシング、ソフトボール、卓球、バレーボール、カヌーであり、昭和60年代以降が10名、50年代4名、40年代2名と近年実業団への就職が増える傾向にある。

競技を完全に引退した139名の引退理由は図15に示したとおりである。7項目から一つ強制選択させたのだが、「卒業してまでやりたくなかった」という理由が第1位であった。卒業後に指導者になった者のほとんどは「仕事に専念したので」引退したと回答していたので、「やりたくない」という回答は大学時代で燃え尽きてしまったのかもしれない。

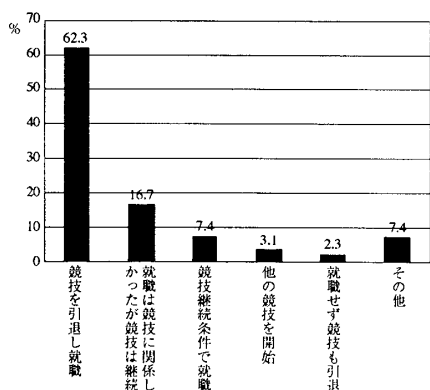


図14. 大学卒業後の競技との関わり

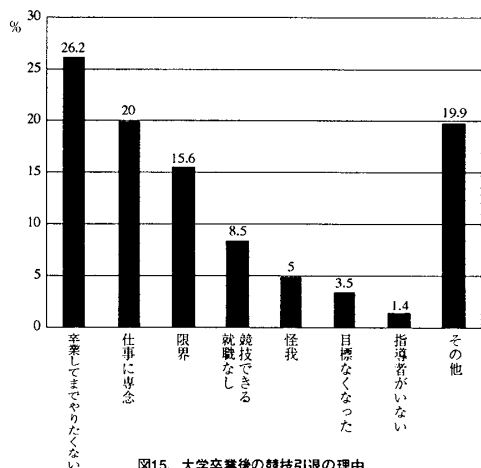


図15. 大学卒業後の競技引退の理由

### まとめ

本学の8運動部の卒業生のうちエリート競技者ではない220名を対象にした質問紙調査の結果、以下のことが明らかにされた。

1. 過去のスポーツキャリアでは、異種目継続型のほうが同一種目継続型より多かった。8割が中学校からスポーツを開始していた。同一種目しか体験していないものは3割であった。
2. スポーツ開始の動機は外発的動機づけのほうが多かった。
3. 怪我は半数くらいが体験していた。多いと思われる。部活動をやめたいと思った理由の6割が部活動に付随する要因であった。エリートではない競技者のほうに不満の多いことが予想される。競技を継続したことは半数以上の者が肯定的に評価していた。
4. 勉学との両立に苦勞した者としなない者はちょうど半々であった。試合等への参加に対する配慮は、特別欠課で十分であると6割が考えていた。もっと学びたかったことには、スポーツの理論(主として生理学的なこと)を中心に、色々な要望が示された。
5. 大学卒業後は、7割が競技を引退していた。競技力のあまり高くない競技者の卒業後としては肯ける結果である。他方、実業団に就職する者の割合が近年少しずつ上昇してきている。

謝辞 本研究の調査のために名簿を貸して頂いた8運動部の関係者の方、および調査に協力頂いた卒業生の皆様に心より感謝いたします。

### 引用・参考文献

阿江美恵子ら、「本学競技者に関する研究(4) - エリート競技者の心理的問題に関する分析 -」、東京女子体育大学紀要、32: 16-25、1997a.

阿江美恵子ら、「一流女性競技者の社会学的一考察 (1)ー競技継続についてー」、日本体育学会第48回大会口頭発表、1997b.

Butts, N. K., et al., "The elite athlete," *Sports medical and health science* : N. Y., 1985.

Calhorn, D. W., "Sport, culture, and personality," (second ed.), *Human kinetics* : Champaign, 1987, pp. 52-56.

Etzel, E. F., et al. (Eds.), "Counseling college student-athletes : issues and intervention," *Fitness Information Technology* : Morgantown, 1991, pp. 1-17.

掛水通子ら、「本学競技者に関する研究(3)ー主要国際競技大会出場者の社会的特性についてー」、東京女子体育大学紀要、32:1-15、1997.

日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究ー第1報ー」、昭和56年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1982、Pp. 247.

日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究ー第2報ー」、昭和57年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1983、Pp. 166.

日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究ー第3報ー」、昭和58年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1984、Pp. 238.

杉本厚夫、「4. 中学・高校生の運動部集団」、三好喬ら編著「スポーツ集団と選手づくりの社会学」所蔵、道和書院：東京、1988、pp. 51-65.

杉本厚夫、スポーツ文化の変容、世界思想社：京都、1995a、pp. 103-107.

杉本厚夫、同上書、1995b、pp. 157-172.

体育・スポーツ研究動向研究会（代表松田岩男）、「体育・スポーツ科学の動向分析と研究課題の体系化に関する研究ー第1部ー」、p3、1987.

山崎浩子、「失敗という名のレッスン」、講談社：東京、1994.

(基盤C(2) 課題番号09680140 研究代表者 雨ヶ崎俊子、共同研究者 掛水通子、阿江美恵子) を得て行われた。

〈付記〉この研究は、平成9年度文部省科学研究費